

夢十夜

夏目漱石



## 第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐つてしていると、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然云つた。自分も確にこれは死ぬなと思つた。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぱつちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であつた。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思つた。それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじゃないかなろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜たまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云つた。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写つてるじゃありませんかと、にこりと笑つて見せた。自分は黙つて、顔を枕から離した。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思つた。

しばらくして、女がまたこう云つた。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘つて。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。——赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、——あなた、待つていられますか」

自分は黙つて首肯うなずいた。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待つていて下さい」と思い切つた声で云つた。

「百年、私の墓の傍そばに坐つて待つていて下さい。きつと逢いに来ますから」

自分はただ待つていると答えた。すると、黒い眸ひとみのなかに鮮あざやかに見えた自分の姿が、ぼうつと崩くずれて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思つたら、女の眼がぼちりと閉じた。長い睫まつげの間から涙が頬へ垂れた。——もう死んで

いた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑なめらかな縁ふちの鋭すどい貝であつた。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿しめつた土の匂においもした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を、上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

それから星の破片かけの落ちたのを拾つて来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かつた。長い間大空を落ちていている間まに、角かどが取れて滑なめらかになつたんだろうと思つた。抱だき上あげて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなつた。

自分は苔こけの上に坐つた。これから百年の間こうして待つているんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石はかいしを眺めていた。

そのうちに、女の云った通り日が東から出た。大きな赤い日であつた。それがまた女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんままでのつと落ちて行つた。一つと自分は勘定した。

しばらくするとまた唐紅からくれないの天道てんとうがのそりと上つて来た。そうして黙つて沈んでしまつた。二つとまた勘定した。

自分はこう云う風の一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。しまいには、苔こけの生はえた丸い石を眺めて、自分は女だまに欺だまされたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜はすに自分の方へ向いて青い茎くきが伸びて来た。見る間に長くなつてちようど自分の胸のあたりまで来て留まつた。と思うと、すらりと揺ゆぐ茎くきの頂いただきに、心持首かたぶを傾けていた細

長い一輪の蕾が、ふつくらと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った。そこへ遙の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花卉に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたつた一瞬またたいていた。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

## 第二夜

こんな夢を見た。

和尚おしやうの室を退がって、廊下ろうかづた伝いに自分の部屋へ帰ると行灯あんどうがぼんやり点ともっている。片膝かたひざを座蒲団ざぶとんの上に突いて、灯心を搔かき

立てたとき、花のような丁子ちようじがぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱつと明かるくなつた。

襖ふすまの画えは蕪村ぶそんの筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近おちこちとかいて、寒さむそうな漁夫がが笠かさを傾かたぶけて土手の上を通る。床とこには海中かいちゆうもんじゆ文殊の軸じくが懸かかつている。焚たき残した線香が暗い方でいまだに臭におつている。広い寺だから森閑しんかんとして、人氣ひとけがない。黒い天井てんじように差す丸行灯まるあんどうの丸い影が、仰向あおむく途端とたんに生きてるように見えた。

立膝たてひざをしたまま、左の手で座蒲団ざぶとんを捲めくつて、右を差し込んで見ると、思つた所に、ちゃんとあつた。あれば安心だから、蒲団をもとのごとく直なおして、その上にどつかり坐すわつた。

お前は侍さむらいである。侍なら悟れぬはずはなからうと和尚おしやうが云つた。そういつまでも悟れぬところをもつて見ると、御前は侍ではあるまいと言つた。人間の屑くずじゃと言つた。ははあ怒つたな

と云つて笑つた。口惜しければ悟つた証拠を持つて来いと云つてふいと向をむいた。怪しからん。

隣の広間の床に据えてある置時計が次の刻を打つまでには、きつと悟つて見せる。悟つた上で、今夜また入室する。そうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃する。侍が辱しめられて、生きている訳には行かない。綺麗に死んでしまふ。

こう考えた時、自分の手はまた思はず布団の下へ這入つた。そうして朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐつと束を握つて、赤い鞘を向へ払つたら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光つた。凄

いものが手元から、すうすうと逃げて行くように思われる。そ

うして、ことごとく切先へ集まつて、殺気を一点に籠めてゐる。自分はこの鋭い刃が、無念にも針の頭のように縮められて、九寸五分の先へ来てやむをえず尖つてるのを見て、たちまちぐさりとやりたくなつた。身体からだの血が右の手首の方へ流れて来て、握つてゐる束がにちやにちやする。唇くちびるが顫ふるえた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけておいて、それから全伽ぜんがを組んだ。——趙州じょうしゅう曰く無と。無とは何だ。糞坊主くそぼうずめとはがみをした。

奥歯を強く咬かみ締しめたので、鼻から熱い息が荒く出る。こめかみが釣つて痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやつた。

懸物かけものが見える。行灯が見える。暈たみが見える。和尚やかんあたまの薬缶頭やくあんあたまがありありと見える。鰐口わにぐちを開あいて嘲笑あざわらつた声まで聞える。怪けしからん坊主だ。どうしてもあの薬缶を首にしなくてはならん。

悟つてやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云うのにやつぱり線香の香においがした。何だ線香のくせに。

自分はいきなり拳骨げんこつを固めて自分の頭をいやと云うほど擲なぐつた。そうして奥歯をぎりぎりりょうわきと嚙かんだ。両腋りょうわきから汗が出る。背中が棒のようになった。膝ひざの接目つぎめが急に痛くなつた。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。けれども痛い。苦しい。無むはなかなか出て来ない。出て来ると思うとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜くやしくなる。涙がほろほろ出る。ひと思おもに身おもとを巨巖おおいわの上うへにぶつけて、骨も肉もめちやめちやに碎くだいてしまいたくなる。

それでも我慢してじつと坐つていた。堪たえがたいほど切ないものを胸むねに盛いれて忍んでいた。その切ないものが身体からだ中の筋肉あせを下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようあせと焦る

けれども、どこも一面に塞ふさがつて、まるで出口がないような残刻極まる状態であつた。

そのうちに頭が変になつた。行灯あんどうも蕪村ぶそんの画えも、畳たたみも、違棚ちがいだなも有つて無いような、無くつて有るように見えた。と云つて無はちつとも現前げんぜんしない。ただ好加減いいかげんに坐つていたようである。ところへ忽然こつぜん隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はつと思つた。右の手をすぐ短刀にかけた。時計が二つ目をチーンと打つた。

### 第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供おふを負おつてる。たしかに自分の子である。ただ

不思議な事にはいつの間にか眼が潰れて、青坊主になつてゐる。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からきと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等だ。

左右は青田である。路は細い。鷺の影が時々闇に差す。

「田圃へかかったね」と背中で云つた。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向けるようにして聞いたら、「だって鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖くなつた。こんなものを背負つていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなかるうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、背中で、

「ふふん」と云う声をした。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。ただ

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙って森を目標めじるしにあるいて行つた。田の中の路が不規

則にうねつてなかなか思うように出られない。しばらくすると

二股ふたまたになった。自分は股またの根に立つて、ちよつと休んだ。

「石が立つてるはずだがな」と小僧が云つた。

なるほど八寸角の石が腰ほどの高さよこたに立っている。表には左

り日ひヶ窪くぼ、右堀田原ほったはらとある。闇やみだのに赤い字あきらが明かに見えた。

赤い字は井守いもりの腹のような色であつた。

「左が好いだろう」と小僧が命令した。左を見るとさつき森が闇の影を、高い空から自分らの頭の上へ抛なげかけていた。自分ちゆうちよはちよつと躊躇した。

「遠慮しないでもいい」と小僧がまた云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹の中では、よく盲目めくらのくせに何でも知ってるなと考えながら一筋道を森へ近づいてくると、背中で、「どうも盲目は不自由でいけないね」と云った。

「だから負おつてやるからいいじゃないか」

「負もらぶつて貰もらつてすまないが、どうも人に馬鹿にされていけない。親にまで馬鹿にされるからいけない」

何だか厭いやになった。早く森へ行つて捨ててしまおうと思つて急いだ。

「もう少し行くと解る。——ちようどこんな晩だったな」と背

中で独言ひとりごとのように云っている。

「何が」と際きわどい声を出して聞いた。

「何がって、知ってるじゃないか」と子供は嘲あざけるように答えた。すると何だか知ってるような気がし出した。けれども判然はつきりとは分らない。ただこんな晩であつたように思える。そうしてもう少し行けば分るように思える。分つては大変だから、分らないうちに早く捨ててしまつて、安心しなくつてはならないように思える。自分はますます足を早めた。

雨はさつきから降っている。路はだんだん暗くなる。ほとんど夢中である。ただ背中に小さい小僧がくつついていて、その小僧が自分の過去、現在、未来をことごとく照して、寸分の事実は洩もらさない鏡のように光っている。しかもそれが自分の子である。そうして盲目である。自分はたまたまなくなつた。

「ここだ、ここだ。ちようどその杉の根の処だ」

雨の中で小僧の声は判然聞えた。自分は覚えず留つた。いつしか森の中へ這入つていた。一間ばかり先にある黒いものはたしかに小僧の云う通り杉の木と見えた。

「御父さん、その杉の根の処だったね」

「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。

「文化五年辰年だろう」

なるほど文化五年辰年らしく思われた。

「御前がおれを殺したのは今からちようど百年前だね」

自分はこの言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云う自覚が、忽然として頭の中に起つた。おれは人殺であつたんだ。たと始めて気がついた途端に、背中の子が急に石地蔵のように

重くなつた。

#### 第四夜

広い土間の真中に涼み台のようなものを据えて、その周囲に小さい床几が並べてある。台は黒光りに光っている。片隅には四角な膳を前に置いて爺さんが一人で酒を飲んでゐる。肴は煮しめらしい。

爺さんは酒の加減でなかなか赤くなつてゐる。その上顔中つやつやして皺と云うほどのものはどこにも見当らない。ただ白い髯をありたけ生やしているから年寄と云う事だけはわかる。自分は子供ながら、この爺さんの年はいくつなんだろうと思つた。ところへ裏の笥から手桶に水を汲んで来た神さんが、前垂

で手を拭きながら、

「御爺さんはいくつかね」と聞いた。爺さんは頬張つた煮<sup>にし</sup>めを呑み込んで、

「いくつか忘れたよ」と澄ましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟<sup>はさ</sup>んで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんは茶碗<sup>ちやわん</sup>のような大きなもので酒をぐいと飲んで、そうして、ふうと長い息を白い髻の間から吹き出した。すると神さんが、

「御爺さんの家<sup>うち</sup>はどこかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、

「臍<sup>へそ</sup>の奥だよ」と云つた。神さんは手を細い帯の間に突<sup>つ</sup>込んだまま、

「どこへ行くかね」とまた聞いた。すると爺さんが、また茶碗のような大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前のような息をふ

うと吹いて、

「あつちへ行くよ」と云った。

「真直まつすぐかい」と神さんが聞いた時、ふうと吹いた息が、障子しょうじを通り越して柳の下を抜けて、河原かわらの方へ真直まつすぐに行つた。

爺さんが表へ出た。自分も後あとから出た。爺さんの腰に小さい瓢箪ひょうたんがぶら下がっている。肩から四角な箱を腋わきの下へ釣るしている。浅黄あさぎの股引ももひきを穿はいて、浅黄の袖無そでなしを着ている。足袋たびだけが黄色い。何だか皮で作つた足袋のように見えた。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四人いた。爺さんは笑いながら腰から浅黄の手拭てぬぐいを出した。それを肝心かんじん綯よりのように細長く綯よつた。そうして地面じびたの真中に置いた。それから手拭まわりの周圍まわりに、大きな丸い輪を描かいた。しまいに肩にかけた箱の中から真鍮しんちゆうで製こしらえた飴屋あめやの笛ふえを出した。

「今にその手拭が蛇へびになるから、見ておろう。見ておろう」と繰返くりかえして云った。

子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ていた。

「見ておろう、見ておろう、好いか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる廻り出した。自分は手拭ばかり見ていた。けれども手拭はいつこう動かなかつた。

爺さんは笛をぴいぴい吹いた。そうして輪の上を何遍も廻つた。草鞋わらじを爪立つまだてるように、拔足くわをするように、手拭に遠慮をするように、廻つた。怖こわそうにも見えた。面白おもしろそうにもあつた。やがて爺さんは笛をぴたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭の首を、ちよいと撮つまんで、ぽつと放ほうり込こんだ。

「こうしておく、箱の中で蛇へびになる。今に見せてやる。今に

見せてやる」と云いながら、爺さんが真直に歩き出した。柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行つた。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでも追ついて行つた。爺さんは時々「今になる」と云つたり、「蛇になる」と云つたりして歩いて行く。しまいには、

「今になる、蛇になる、

きつとなる、笛が鳴る、」

と唄うたいながら、とうとう河の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思つてしていると、爺さんはぎぶぎぶ河の中へ這はい入り出した。始めは膝ひざくらいの深さであったが、だんだん腰から、胸の方まで水に浸つかつて見えなくなる。それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、

真直になる」

と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行つた。そうして髯ひげも顔も頭も頭中ずきんもまるで見えなくなつてしまつた。

自分は爺おやさんが向岸むこうぎしへ上がった時に、蛇を見せるだろうと思つて、蘆あしの鳴る所に立つて、たつた一人いつまでも待つていた。けれども爺さんは、とうとう上がつて来なかつた。

## 第五夜

こんな夢を見た。

何でもよほど古い事で、神代かみよに近い昔と思われるが、自分が軍いくさをして運悪く敗北まけたために、生擒いけどりになつて、敵の大將の前に引き据すえられた。

その頃の人はみんな背が高かった。そうして、みんな長い髻を生はやしていた。革の帯を締しめて、それへ棒のような剣つるぎを釣るつっていた。弓は藤蔓ふじづるの太いのをそのまま用いたように見えた。漆うるしも塗ぬつてなければ磨みがきもかけてない。極きわめて素樸そぼくなものであつた。

敵の大将は、弓の真中を右の手で握にぎつて、その弓を草の上へ突ついて、酒甕さかがめを伏ふせたようなものの上に腰をかけていた。その顔を見ると、鼻の上で、左右の眉まゆが太く接つ納なつていゝ。その頃髪かみ剃そりと云うものは無論なかつた。

自分は虜とりこだから、腰をかける訳に行かない。草の上に胡坐あぐらをかいていた。足には大きな藁わら沓ぐつを穿はいていた。この時代の藁わら沓ぐつは深いものであつた。立つと膝頭ひざがしらまで来た。その端はしの所は藁わらを少し編あみ残のこして、房ふさのように下くだげて、歩くとばらばら動くように

して、飾りとしていた。

大将は篝火かがりびで自分の顔を見て、死ぬか生きるかと聞いた。これはその頃の習慣で、捕虜とりこにはだれでも一応はこう聞いたものである。生きると答えると降参した意味で、死ぬと云うと屈服くつぷくしないと云う事になる。自分は一言死ぬと答えた。大将は草の上うへに突いていた弓を向うへ抛なげて、腰に釣かるした棒ぼうのような剣けんをするりと抜きかけた。それへ風に靡なびいた篝火かがりびが横から吹きつけた。自分は右の手を楓かえでのように開いて、掌たなごころを大将の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云う相図である。大将は太い剣をかちやりと鞘さやに収めた。

その頃でも恋はあった。自分は死ぬ前に一目思う女に逢あいたいと云った。大将は夜が開けて鶏とりが鳴くまでなら待つと云った。鶏が鳴くまでに女をここへ呼ばなければならぬ。鶏が鳴いて

も女が来なければ、自分は逢わずに殺されてしまう。

大将は腰をかけたまま、篝火を眺めている。自分は大きな藁沓わらぐつを組み合わせたまま、草の上で女を待っている。夜はだんだん更ける。

時々篝火が崩れる音がする。崩れるたびに狼狽うろたえたように焰ほのおが大将になだれかかる。真黒な眉まゆの下で、大将の眼がぴかぴかと光っている。すると誰やら来て、新しい枝をたくさん火の中へ抛なげ込んで行く。しばらくすると、火がぱちぱちと鳴る。暗闇くらやみを弾はじき返かえすような勇ましい音であった。

この時女は、裏の櫓ならの木に繋つないである、白い馬を引き出した。鬣たてがみを三度撫なでて高い背にひらりと飛び乗った。鞍くらもない鎧あぶみもない裸馬はだかうまであった。長く白い足で、太腹ふとばらを蹴けると、馬はいつさんに駆け出した。誰かが篝りを継つぎ足たしたので、遠くの空が薄明

るく見える。馬はこの明るいものを目懸けて闇の中を飛んで来る。鼻から火の柱のような息を二本出して飛んで来る。それでも女は細い足でしきりなしに馬の腹を蹴っている。馬は蹄の音が宙で鳴るほど早く飛んで来る。女の髪は吹流しののように闇の中に尾を曳いた。それでもまだ箒のある所まで来られない。

すると真闇な道の傍で、たちまちこけこつこつという鶏の聲がした。女は身を空様に、両手に握った手綱をうんと控えた。馬は前足の蹄を堅い岩の上に発矢と刻み込んだ。

こけこつこつと鶏がまた一声鳴いた。

女はあつと云つて、緊めた手綱を一度に緩めた。馬は諸膝を折る。乗った人と共に真向へ前へのめった。岩の下は深い淵であつた。

蹄の跡はいまだに岩の上に残っている。鶏の鳴く真似をした

ものは天探女あまのじやくである。この蹄の痕あとの岩に刻みつけられている間、天探女は自分の敵かたきである。

## 第六夜

運慶うんけいが護国寺ごこくじの山門で仁王におうを刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行つて見ると、自分より先にもう大勢集まつて、しきりに下馬評げばひようをやつていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹ななが斜ななめに山門の甍いらかを隠して、遠い青空まで伸のびている。松の緑と朱塗しゆぬりの門が互いに照あり合つてみごとに見える。その上松の位地が好い。門の左の端を眼障めざわりにならないように、斜はずに切つて行つて、上になるほど幅を広く屋根まで突出つきだしているのが何となく古風

である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。その中でも車夫が一番多い。辻待つじまちをして退屈だから立っているに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云っている。

「人間を拵こしらえるよりもよつほど骨が折れるだろう」とも云っている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫ほるのかね。へえそうかね。私わっしやまた仁王はみんな古いのばかりかと思つた」と云つた男がある。

「どうも強そうですね。なんだつてえますぜ。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつて云いますぜ。何でも日本武尊やまとだけのみことよりも強いんだつてえからね」と話しかけた男もある。この男は

尻を端折はしよつて、帽子を被かぶらずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頓とんじやく着なく鑿のみと槌つちを動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺あたりをしきりに彫ほり抜ぬいて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子えぼしのようなものに乗せて、素袍すおうだか何だかわからない大きな袖そでを背中せなかで括くくつている。その様子がいかにも古くさい。わいわい云つてる見物人とはまるで釣り合が取れないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇体ともとんと感じ得ない様子で一生懸命に彫あおむつている。仰向あおむいてこの態度を眺めていた一

人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我れとあるのみと云う態度だ。天晴れだ」と云つて賞め出した。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している」と云つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の齒を堅に返すや否や斜すに、上から槌を打ち下した。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に応じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がつて来た。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念

を挟さしはさんでおらんように見えた。

「よくああ無造作むぞうざに鑿うを使つて、思うような眉まみえや鼻はなができるものだな」と自分はあんまり感心かみんしたから独言ひとりごとのように言つた。するとさつきさつきの若い男が、

「なに、あれは眉まゆや鼻はなを鑿うで作るんじゃない。あの通りの眉まゆや鼻はなが木の中に埋うまつてゐるのを、鑿うと槌つちの力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだからけつして間違まちがうはずはない」と云つた。

自分はこの時始めて彫刻てうこくとはそんなものかと思ひ出した。はたしてそうなら誰たれにでもできる事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王にわうが彫ほつてみたくなつたから見物をやめてさつそく家うちへ帰つた。

道具箱どうぐばこから鑿うと金槌かなづちを持ち出して、裏へ出て見ると、せんだつ

ての暴風あらしで倒れた檜かしを、薪まきにするつもりで、木挽こびきに挽ひかせた手頃やつな奴やつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いきいよく彫ほり始めて見たが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その次のにも運悪く掘り当てる事ができなかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。自分自分は積んである薪まきを片かたつ端はしから彫ほつて見たが、どれもこれも仁王仁王を蔵かくしているのはなかつた。ついに明治の木にはとうてい仁王仁王は埋うまつていないものだのだと悟さとつた。それで運慶運慶が今日きょうまで生き生きている理由理由もほぼ解とつた。

## 第七夜

何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしの絶間なく黒い煙を吐いて浪を切つて進んで行く。凄じい音である。けれどもどこへ行くんだか分らない。ただ波の底から焼火箸のような太陽が出る。それが高い帆柱の真上まで来てしばらく挂っているかと思うと、いつの間にか大きな船を追い越して、先へ行つてしまふ。そうして、しまいには焼火箸のようにじゅつといつてまた波の底に沈んで行く。そのたんびに蒼い波が遠くの向うで、蘇枋の色に沸き返る。すると船は凄じい音を立ててその跡を追かけて行く。けれども決して追つかない。

ある時自分は、船の男を捕まえて聞いて見た。

「この船は西へ行くんですか」

船の男は怪訝な顔をして、しばらく自分を見ていたが、やがて、

「なぜ」と問い返した。

「落ちて行く日を追かけるようだから」

船の男はからからと笑った。そうして向うの方へ行つてしまつた。

「西へ行く日の、果は東か。それは本真か。東出る日の、御里は西か。それも本真か。身は波の上。戢枕。流せ流せ」と囁してゐる。舳へ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太い帆綱を手繰つていた。

自分は大変心細くなつた。いつ陸へ上がれる事か分らない。そうしてどこへ行くのだから知れない。ただ黒い煙を吐いて波を切つて行く事だけはたしかである。その波はすこぶる広いものであつた。際限もなく蒼く見える。時には紫にもなつた。ただ船の動く周囲だけはいつでも真白に泡を吹いていた。自分は

変心細かった。こんな船にいるよりいつそ身を投げて死んでしまおうかと思つた。

のりあい乗合はたくさんいた。たいていは異人のようであつた。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇つて船が揺れた時、一人の女が欄てすりに倚よりかかつて、しきりに泣いていた。眼を拭く手巾ハンケチの色が白く見えた。しかし身体からだには更紗さらさのような洋服を着ていた。この女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気がついた。

ある晩甲板かんぱんの上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知つてるかと尋ねた。自分はつまらないから死のうとさえ思つている。天文学などを知る必要がない。黙つていた。するとその異人が金牛宮きんぎゆうの頂ういただきにある七星しちせいの話をして聞かせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだと言つた。

最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙つていた。

或時サロンに這入はいつたら派手はでな衣裳いしやうを着た若い女が向うむきになって、洋琴ピアノを弾ひいていた。その傍そばに背の高い立派な男が立つて、唱歌うたを唄うたっている。その口が大変大きく見えた。けれども二人は二人以外の事にはまるで頓着とんじゃくしていない様子であつた。船に乗っている事さえ忘れていようであつた。

自分はますますつまらなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板かんばんを離れて、船と縁が切れたその刹那せつなに、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかつたと思つた。けれども、もう遅い。自分は厭いやでも応でも海の中へ這入らなければならぬ。ただ大変高くできてい

た船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。しかし捕つかまえるものがないから、しだいしだいに水に近づいて来る。いくら足を縮ちぢめても近づいて来る。水の色は黒かった。

そのうち船は例の通り黒い煙けぶりを吐いて、通り過ぎてしまった。自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やつぱり乗っている方がよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いだいて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。

## 第八夜

床屋の敷居またを跨いだら、白い着物を着てかたまっていた三四

人が、一度にいらつしやいと云つた。

真中に立つて見廻すと、四角な部屋である。窓が二方に開いて、残る二方に鏡が懸つている。鏡の数を勘定したら六つあつた。

自分はその一つの前へ来て腰をおろした。すると御尻がぶくりと云つた。よほど坐り心地が好くできた椅子である。鏡には自分の顔が立派に映つた。顔の後には窓が見えた。それから帳場格子が斜に見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通る往来の人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎はいつの間にかパナマの帽子を買つて被つている。女もいつの間にか拵らえたものやら。ちよつと解らない。双方とも得意のようであつた。よく女の顔を見ようと思つうちに通り過ぎてしまつた。

豆腐屋とうふやが喇叭らつぱを吹いて通つた。喇叭を口へあてがつているんで、頬ほっぺたが蜂はちに螫さされたように膨ふくれていた。膨れたまんまで通り越したものだから、気がかりでたまらない。生涯しょうがい蜂に螫さされているように思う。

芸者が出た。まだ御化粧おつくりをしていない。島田の根が緩ゆるんで、何だか頭に締しまりが無い。顔も寝ぼけている。色沢いろつやが気の毒なほど悪い。それで御辞儀おじぎをして、どうも何とかですと云つたが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後ろうしへ来て、鋏はさみと櫛くしを持って自分の頭を眺め出した。自分は薄い髭ひげを捩ひねって、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。白い男は、何なにも云わずに、手に持った琥珀色こはくいろの櫛くしで軽く自分の頭を叩たたいた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は

白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちやきちやきと鋏を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見るつもりで眼を睜みはっていたが、鋏の鳴るたんびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉じた。すると白い男が、こう云つた。

「旦那だんなは表の金魚売を御覧なすつたか」

自分は見ないと云つた。白い男はそれぎりで、しきりと鋏を鳴らしていた。すると突然大きな声あふねえで危険と云つたものがある。はつと眼を開けると、白い男の袖そでの下に自転車の輪が見えた。人力の梶棒かじぼうが見えた。と思うと、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなつた。鋏の音がちやきちやきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻つて、耳の所かを刈り始めた。

毛が前の方へ飛ばなくなつたから、安心して眼を開けた。栗餅あわもちや、餅やあ、餅や、と云う声がすぐ、そこでする。小さい杵きねをわざと臼うすへあてて、拍子ひょうしを取つて餅を搗ついている。栗餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちよつと様子が見たい。けれども栗餅屋はけつして鏡の中に出て来ない。ただ餅を搗く音だけする。

自分はあるたけの視力で鏡の角かどを覗のぞき込むようにして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐つている。色の浅黒い眉毛まみえの濃い大柄おおがらな女で、髪を銀杏返いちようがえしに結ゆつて、黒縹くろじゆす子の半襟はんえりのかかつた素袷すあわせで、立膝たてひざのまま、札さつの勘定かんじようをしている。札は十円札らしい。女は長い睫まつげを伏せて薄くちびるい唇くちびるを結んで一生懸命に、札の数を讀んでいるが、その讀み方がいかにも早い。しかも札の数はどこまで行つても尽きる様子がない。膝ひざの

上に乗っているのはたかだか百枚ぐらいだが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分は茫然<sup>ぼうぜん</sup>としてこの女の顔と十円札を見つめていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましょう」と云った。ちようどうまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場<sup>ちようば</sup>格子の方をふり返って見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかった。

代<sup>だい</sup>を払って表へ出ると、門口<sup>かどぐち</sup>の左側に、小判<sup>こばん</sup>なりの桶<sup>おけ</sup>が五つばかり並べてあつて、その中に赤い金魚や、斑入<sup>ふいり</sup>の金魚や、瘦<sup>や</sup>せた金魚や、肥<sup>ふと</sup>った金魚がたくさん入れてあつた。そうして金魚売<sup>うしろ</sup>がその後<sup>うしろ</sup>にいた。金魚売は自分の前に並べた金魚を見つめたまま、頬杖<sup>ほおづえ</sup>を突いて、じつとしてゐる。騒<sup>おもうらい</sup>がしい往来の活動にはほとんど心を留めていない。自分はしばらく立つてこの金魚

売を眺めていた。けれども自分が眺めている間、金魚売はちつとも動かなかつた。

## 第九夜

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争いくさが起りそうに見える。焼け出された裸馬はだかうまが、夜昼となく、屋敷の周囲まわりを暴れ廻まわると、それを夜昼となく足軽共あしがるともが犇ひしめきながら追おつかけているよ  
うな心持がする。それでいて家のうちは森しんとして静かである。

家には若い母と三つになる子供がいる。父はどこかへ行つた。父がどこかへ行つたのは、月の出ていない夜中であつた。床とこの上で草鞋わらじを穿はいて、黒い頭巾ずきんを被かぶつて、勝手口から出て行つた。その時母の持つていた雪洞ほんぼりの灯ひが暗い闇やみに細長く射して、生垣いけがき

の手前にある古い檜ひのきを照らした。

父はそれきり帰つて来なかつた。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。子供は何とも云わなかつた。しばらくしてから「あつち」と答えるようになった。母が「いつ御帰り」と聞いてもやはり「あつち」と答えて笑つていた。その時は母も笑つた。そうして「今に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えたのみである。時々「御父様はどこ」と聞かれて「今に」と答える事もあつた。

夜になつて、四隣あたりが静まると、母は帯を締め直して、鮫鞘さめざやの短刀を帯の間へ差しして、子供を細帯で背中へ背負しょつて、そつと潜くぐりから出て行く。母はいつでも草履ぞうりを穿はいていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の背中で寝てしまう事もあつた。

土塀つちべいの続いてゐる屋敷町を西へ下くだつて、だらだら坂を降り尽つくすと、大きな銀杏いちようがある。この銀杏を目標めじるしに右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃たんぼで、片側は熊笹くまざさばかりの中を鳥居まで来て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立こだちになる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き当ると、古い拝殿の階段の下に出る。鼠色ねずみいろに洗い出された賽銭箱さいせんばこの上に、大きな鈴の紐ひもがぶら下がって昼間見ると、その鈴の傍そばに八幡宮はちまんぐうと云う額かかが懸かつてゐる。八の字が、鳩はとが二羽向いあつたような書体にできてゐるのが面白い。そのほかにもいろいろの額がある。たいていは家中かちゆうのものもの射抜いた金的きんてきを、射抜いたもの名前に添えたのが多い。たまには太刀たちを納めたものもある。

鳥居を潜くぐると杉の梢こずえでいつでも梟ふくろうが鳴いてゐる。そうして、冷飯草履ひやめしぞうりの音がぴちやぴちやする。それが拝殿の前でやむと、

母はまず鈴を鳴らしておいて、すぐにしやがんで柏手を打つ。たいていはこの時梟が急に鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。母の考えでは、夫が侍であるから、弓矢の神の八幡へ、こうやつて是非ない願をかけたら、よもや聴かれぬ道理はなからうと一匁に思いつめている。

子供はよくこの鈴の音で眼を覚まして、四辺を見ると真暗なものだから、急に背中で泣き出す事がある。その時母は口の内何か祈りながら、背を振ってあやそうとする。すると旨く泣きやむ事もある。またますます烈しく泣き立てる事もある。いづれにしても母は容易に立たない。

一通り夫の身の上を祈ってしまうと、今度は細帯を解いて、背中の子を摺りおろすように、背中から前へ廻して、両手に抱きながら拜殿を上つて行つて、「好い子だから、少しの間、待つ

ておいでよ」ときつと自分の頬を子供の頬へ擦りつける。そうして細帯を長くして、子供を縛っておいて、その片端を拜殿の欄干に括りつける。それから段々を下りて来て二十間の敷石を往つたり来たり御百度を踏む。

拜殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帯の丈のゆるす限り、広縁の上を這い廻っている。そう云う時は母にとつて、はなはだ楽な夜である。けれども縛つた子にひいひい泣かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方のない時は、途中で拜殿へ上つて来て、いろいろすかしておいて、また御百度を踏み直す事もある。

こう云う風に、幾晩となく母が気を揉んで、夜の目も寝ずに心配していた父は、とくの昔に浪士のために殺されていたのである。

こんな悲かなしい話を、夢の中で母から聞いた。

## 第十夜

庄太郎が女に攫さらわれてから七日目の晩にふらりと帰つて来て、急に熱が出てどつと、床に就ついていると云つて健けんさんが知らせに来た。

庄太郎は町内一の好男子こうだんしで、至極しごく善良な正直者である。ただ一つの道楽がある。パナマの帽子を被かぶつて、夕方になると水菓子屋みずがしやの店先へ腰をかけて、往來おうらいの女の顔を眺めている。そうしてしきりに感心している。そのほかにはこれと云うほどの特色もない。

あまり女が通らない時は、往來を見ないで水菓子を見ている。

水菓子にはいろいろある。水蜜桃や、林檎や、枇杷や、バナナを綺麗に籠かごに盛つて、すぐ見舞物みやげものに持つて行けるように二列に並べてある。庄太郎はこの籠を見ては綺麗きれいだと云つてゐる。商売をするなら水菓子屋に限ると云つてゐる。そのくせ自分はパナマの帽子を被つてぶらぶら遊んでゐる。

この色がいと云つて、夏蜜柑なつみかんなどを品評する事もある。けれども、かつて銭ぜにを出して水菓子を買つた事がない。ただでは無論食わない。色ばかり賞ほめてゐる。

ある夕方一人の女が、不意に店先に立つた。身分のある人として見えて立派な服装をしている。その着物の色がひどく庄太郎の気に入つた。その上庄太郎は大変女の顔に感心してしまつた。そこで大事なパナマの帽子を脱とつて丁寧ていねいに挨拶あいさつをしたら、女は籠詰かごづめの一番大きいのを指さして、これを下さいと云うんで、庄太

郎はすぐその籠を取つて渡した。すると女はそれをちよつと提さげて見て、大変重い事と云つた。

庄太郎は元來閑人ひまじんの上に、すこぶる気作きさくな男だから、ではお宅まで持つて参りましょうと云つて、女といつしよに水菓子屋を出た。それぎり帰つて来なかつた。

いかな庄太郎でも、あんまり呑気のんき過ぎる。只事ただごとじゃ無かろうと云つて、親類や友達が騒ぎ出していると、七日目の晩になつて、ふらりと帰つて来た。そこで大勢寄つてたかつて、庄さんどこへ行つていたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乗つて山へ行つたんだと答えた。

何でもよほど長い電車に違いない。庄太郎の云うところによると、電車を下りるとすぐと原へ出たさうである。非常に広い原で、どこを見廻しても青い草ばかり生はえていた。女といつしよ

に草の上を歩いて行くと、急に絶壁きりぎしの天辺てつべんへ出た。その時女が庄太郎に、ここから飛び込んで御覧なさいと云った。底を覗のぞいて見ると、切岸きりぎしは見えるが底は見えない。庄太郎はまたパナマの帽子を脱いで再三辞退した。すると女が、もし思い切つて飛び込まなければ、豚ぶたに舐なめられますが好うござんすかと聞いた。庄太郎は豚と雲右衛門が大嫌だいきらだった。けれども命には易かえられないと思つて、やつぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴らして来た。庄太郎は仕方なしに、持つていた細い檳榔樹びんろうじゆの洋杖ステツキで、豚の鼻頭はなづらを打ぶつた。豚はぐうと云いながら、ころりと引ひつ繰くり返かえつて、絶壁の下へ落ちて行つた。庄太郎はほつと一ひと息接いきついでいるとまた一匹の豚が大きな鼻を庄太郎に擦すりつけに来た。庄太郎はやむをえずまた洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いてまた真逆まっさかさま様に穴の底へ転ころげ込んだ。する

とまた一匹あらわれた。この時庄太郎はふと気がついて、向うを見ると、遥はるかの青草原の尽きる辺あたりから幾万匹か数え切れぬ豚が、群むれをなして一直線に、この絶壁の上に立っている庄太郎を目懸めがけて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心しんから恐縮した。けれども仕方がないから、近寄ってくる豚の鼻頭を、一つ一つ丁寧ていねいに檳榔樹の洋杖で打っていた。不思議な事に洋杖が鼻へ触さわりさえすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。覗のぞいて見ると底の見えない絶壁を、逆さかさになった豚が行列して落ちて行く。自分がこのくらい多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながら怖こわくなつた。けれども豚は続々くる。黒雲に足が生はえて、青草を踏み分けるような勢いで無尽蔵むじんぞうに鼻を鳴らしてくる。

庄太郎は必死の勇をふるって、豚の鼻頭なのかむぼんたたを七日六晩叩いた。けれども、とうとう精根が尽きて、手が菟藟こんにやくのように弱つて、し

まいに豚に舐められてしまった。そうして絶壁の上へ倒れた。

健さんは、庄太郎の話をここまでして、だからあんまり女を見るのは善くないよと云った。自分ももつともだと思つた。けれども健さんは庄太郎のパナマの帽子が貰いたいと云つていた。

庄太郎は助かるまい。パナマは健さんのものだろう。

# 夢十夜

底本：「夏目漱石全集 10 卷」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和 63）年 7 月 26 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 7 月 15 日第 5 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：野口英司

1997 年 12 月 16 日公開

2004 年 2 月 28 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。